グルーピングが要養護児童の「居場所」に与える影響

－児童養護施設における住環境に関する研究 その1－

THE INFLUENCES OF GROUPING ON THE LOCUS OF CHILDREN IN A CHILDREN'S HOME

－ A study on the living environment of a children's home Part 1－

杉本 範子*, 大原 一興**, 藤岡 泰寛***

Noriko SUGIMOTO, Kazuoki OHARA and Yasuhiro FUJIOKA

This study examines on the *locus* of children with special care as they go through changes in their living environment of their home by interviewing. Main results are as follows:

- 1) When children do not have their proper *loca*, they walk around in their home to search for their *loca*;
- 2) When children have their proper *loca*, they can feel the sense of belonging and build up the sense of fellowship among one another;
- 3) When children have their proper *loca*, they try to claim own territory;
- 4) When a child's *locus* is shared with another person, that child seeks another locus to be alone

Keywords : *Children's Home, Shousha, Taisha, Grouping, Locus, Privacy, Household Identity*

児童養護施設、要養護児童、小舎、大舎、グルーピング、居場所、プライバシー、共用空間

1. はじめに

1-1 研究の背景と目的

児童養護施設は、何らかの理由で家庭では養育できなくなり、児童相談所の判断と親の同意のもと、施設に入所した幼児（2歳）から高校卒業（18歳）までの子どもたちを、「養護し、あわせてその自立を支援すること」（児童福祉法第41条）を目的とした施設である。現在、30,416人の要養護児童が国内551の児童養護施設に居住している^{注1)}。

近年、虐待による入所率の増加や援助の困難なケースの増加など2004年の児童虐待防止法の改正とあいまって、ケアの個別化・ケア単位の小規模化^{注2)}という視点が国の児童養護の施策に転換された。すなわち、収容から養育委託へ、集団から個別化へ、大規模から小規模へという流れである。大舎制の施設が7割を超える現在^{注3)}このシステムの変更は容易なことではないと思われる。

上記の児童養護施設の変革をふまえ、本稿は児童養護施設の住環境に関する研究の一環として、既存の施設を利用して大舎(中舎)制のケア体制からユニットケアに近づけた(本稿ではこれを「グルーピング」^{注4)}という)施設の環境の変化がそこに居住する子ども達の「居場所」に与えた影響を、施設内の子ども達の「居場所」とその選択理由に着目し、子ども達が望む施設の安定した環境のあり方を模索し、今後の児童養護施設の建築計画の一助となることを目的とする。

1-2 研究の位置づけ

児童養護に関する既往研究の中心は、社会福祉分野のケアワークに関するもので、ホスピタリズム^{注5)}、家庭的養護論^{注6)}、愛着理論^{注7)}

など多数ある。建築分野では施設形態を分類した研究^{注8)}、養護施設を処遇・空間形態から施設の類型化を試みた坪井の研究^{注9)}、施設建替時におけるワークショップ活用の計画的実践の本間・小野田らの研究^{注10)}、施設の利用主体の子ども達に焦点を当てた研究は少なく、グループホームにおける児童の行為・移動頻度の分析から子ども達の要求を満たす空間構成の必要を指摘する筈・本間^{注11)}の研究、情短施設での環境療法のケーススタディから小舎型空間の有効性を示唆した石垣他^{注12)}の研究がある程度である。

本研究では、児童養護施設を要養護児童が人間関係を育み成長する場と捉え、子ども達が施設に「居場所」を感じることがその第1条件であると考ええる。というのも精神医学者のPutnamが「(治療を受ける)児童は愛情と安全とを必要とする。このニーズを満たすものは信頼できるケア関係と安定した環境である」^{注13)}と述べているように施設に居住する子ども達が自分の「居場所」を施設に感じられることがこの安定した環境となりえると考えからである。

1-3 「居場所」の定義とその捉え方

「居場所」は「人が居る所、いどころ」(大辞林第2版 三省堂)という物理的側面だけでなく、自己を再確認させてくれ、自己存在感を感じさせ安心感を実感させてくれる心理的側面を持つと考えられている^{注14,15)}。本稿では、「居場所」を捉えるにあたって、その物理的側面だけではなく、子ども達の心理的側面を考慮し、日常生活の場(施設)で「いたい」または「好き」と認識する主観的な面を重視することにした。そこで、ここでは「いたいと感じる場所」または「好きな場所」

本稿は2007年日本建築学会大会において発表したものを加筆、再編集したものである。

* 横浜国立大学大学院工学府 博士後期課程・修士(工学)

** 横浜国立大学大学院工学研究院 教授・工博

*** 横浜国立大学大学院工学研究院 講師・博士(工学)

Graduate Student, Faculty of Engineering, Yokohama National Univ., M. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Yokohama National Univ., Dr. Eng.

Lecturer Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Yokohama National Univ., Dr. Eng.

図1 グルーピングの変化過程(模式図)

という場所に適したところとして具体的に選ばれた「場所カード」の空間のことをここでは「居場所」とする^{注16)}。

2. 調査概要と分析

2-1 対象施設の概要・グルーピング状況

調査対象施設は横浜にあるA園である。A園は大きく児童部と幼児部に分かれ、児童部はS・T・A・Bの4ルーム構成で、S・TとA・Bの各2ルーム単位(12~3人×2ルーム)で長らく共用の居間・食堂、寝室、勉強室、準備室(衣類の収納タンスが設置)に分かれていた各部屋を必要ごとに使っていた大舎(中舎)制の生活から、ルーム(12~3人)専用の居間・食堂、そして子ども達専用のベッド・タンス・机が一部屋に揃った「自室」(共用で2~4人/1室)を家具の移動やリフォームによって設置したことを、本稿では「グルーピング」と呼ぶ。洗面所、浴室、W.C.は従来どおりの2ルーム共用で、子ども達のルーム構成、ルームごとに2名の担当保育士、2ルーム1名の指導員がケア

図3 A施設1階

にあたる体制はグルーピング前・後に変化がない。

グルーピングは段階を追ってなされ、図1にその状況を模式図によって示す。①自室を持たないグルーピング前、②2003年4月、A・Bの2ルームはグルーピングし、S・Tの2ルームは以前のままのグルーピングしてない状況(グルーピングI期)、③2003年6月、S・Tの2ルームは自室ができたけれど居間がまだ共有(グルーピングII期)、④2004年4月、S・Tの居間が分離して、各ルーム同じ条件になった(グルーピングIII期)。この結果、各室が共通の廊下を中心に配置されているS・T・Aの3ルームと自室と居間がまとまって配置されているBルームになった。生活環境の変化前後の子どもたちの住空間2階の平面図を図2に示す。高校生はルームと同じ階の離れた位置に個室が与えられ、生活は所属ルームの子ども達と共にする。A施設はもともと女子のみの施設で、2年前より男児が入所するようになった。職員は子ども達と同じ棟の3階にある寮又は近隣に居住して通勤する。

2-2 調査方法

本稿の調査は、1回目をグルーピングII期経過2ヶ月(A・Bルームがグルーピング後5ヶ月経過、S・Tルームは居間共用で自室が確保されて2ヶ月経過)の2003年9月に、2回目をグルーピングIII期、S・Tルームの自室・居間がルーム毎に設置されて2年経過した2006年3月に行った。対象を小学校4年生以上の子どもたちに絞り、次のような方法でインタビュー調査を行った。

①前もって子どもたちが実際に利用している施設内空間(図2・3)を

図2 グルーピング前と後の子ども達の住空間

表1 個人別属性と居場所(入所順)

			2003年9月															前生活経験年数		
部屋名	学年	入園年月	氏名	自室	居間	廊下	園長室	幼児部の部屋	視聴覚室	パソコン室	お御堂	事務室の出入り口	全体のキッチン	オルガンのある部屋	面会室	ベランダ	玄関ポーチ	築山	運動場上庭	運動場下庭
B 中3	2003/10/1	NIB	1	2																2
B 中2	2003/3/29	TO	1																	1年未満
T 高1	2002/12/1	ES								2						1				
A 小6	2002/11/1	YY	1				2													
B 小4	2002/1/31	JT	1																2	
B 中1	2002/1/31	AT	1	2																
T 高2	2002/1/29	MF	1	2																
S 小6	2001/3/26	KY					1											2		
T 高3	2001/3/1	III	1	2																
T 小4	2000/12/2	NO	1	2																
T 小5	1999/1/13	MST	1	2																1~5年未満
A 小5	1998/8/1	SI	1	2																
B 小5	1996/9/24	JF	1	2																
A 小4	1996/9/1	YI	2	1																
T 小4	1995/7/3	MI	1			2														
A 小6	1995/5/24	RS		1	2															
A 中2	1995/5/24	TS	1	2																
S 小5	1995/3/31	EM		2			1													
B 小6	1994/3/1	RT	1	2																
S 高1	1993/4/1	NI	1	2																
B 中3	1992/9/16	SN					1										2			
A 中3	1992/9/1	SK	1	2																
S 中2	1992/9/1	KT	2							1										
S 中3	1992/3/23	YI		2													1			
B 中3	1991/7/1	MSB	1						2											
S 中3	1991/6/26	YK															2		1	
A 中3	1991/6/20	SM					1													2
B 高1	1991/2/16	TIB	1	2																
T 中3	1991/1/24	TT	2							1										
S 高1	1991/1/1	EG	1						2											
S 高2	1991/5/14	YOK		1													2			
T 高2	1989/6/30	MAI		1	2															
B 高3	1988/4/22	MN					2					1								
居場所として選んだ順位				1	2	3	4	5	03-06年対象児童17名											

		2006年3月															前生活経験年数			
部屋名	学年	入園年月	氏名	自室	居間	廊下	園長室	幼児部の部屋	視聴覚室	パソコン室	お御堂	事務室の出入り口	全体のキッチン	オルガンのある部屋	面会室	ベランダ	玄関ポーチ	築山	運動場上庭	運動場下庭
T	中1	2006/2/1	AS		1			2												1年未満
B	中1	2004/11/1	KS	1												2				
B	高1	2003/3/29	TO	1																
T	高3	2002/12/1	ES	1								2								
A	中2	2002/11/1	YY	1	2															
B	小6	2002/1/31	JT	2	1															
S	小4	2001/5/16	MY					1											2	
S	小5	2001/3/26	NW	1												2				
T	小6	2000/12/2	NO	2	1															
B	小4	1999/8/1	RO				1									2				
B	小5	1999/8/1	HS	1												2				
T	中1	1999/1/13	MST	1	2															
T	小5	1997/7/30	YF	1	2															
B	中1	1996/9/24	JF	1																
A	小6	1996/9/1	YT								2					1				
A	中2	1995/5/24	RS	1		2														
A	高1	1995/5/24	TS	1													2			
S	中1	1995/3/31	EM					2												
A	中3	1994/7/14	EK	1					2											
B	中2	1994/3/1	RT														1		2	
S	高1	1992/9/1	KT	1	2															
A	高2	1992/9/1	SK	2				1												
S	高2	1992/3/23	YI																	1
T	高2	1991/1/24	TT	2	1															
S	高3	1991/1/1	EG	1		2														

主任保育よりヒアリングし、その場所名を文字表記した「場所カード」(18枚)と場所の選択理由を示す形容詞等^{注17)}を文字で表記した「選択理由カード」(28枚)を作成する。

②子どもたちに「居場所(好きな場所・いたい場所に言い換えて質問した)」をこれらの「場所カード」から5枚選んでもらい、それぞれの「選択理由カード」と組み合わせながら、「場所カード」の順位付けをしていく。

③居場所ごとにその居場所の具体的な選択「理由」を聞き取った。調査は1回目の被インタビュー者が33名、2回目が25名であった。そのうち両年回答した17名が経年変化の分析対象者である。

○「場所カード」の種類

自室、居間(食堂)、廊下、ベランダ、幼児部の部屋、園長室、お御堂、視聴覚室、パソコン室、オルガンのある部屋、玄関、ポーチ、事務室の出入り口、面会室、運動場上庭、運動場下庭、築山、全体のキッチン

○「選択理由カード」の種類

おちつく、明るい、静か、あたたかい、活気のある、やさしい、おもしろい、気持ちの良い、かわいい、開放的、雰囲気のある、涼しい、緊張感のある、使いやすい、広い、狭い、楽しい、安心な、あたらしい、のびのび、やわらかい、ちかい、けいかいな、高い、低い、小さい、大きい、うるさい

2-3 分析方法

本稿は、「居場所」選択に住環境がどのような影響を与えたのかを「自室」「居間」などの「居場所」から物理的側面を、「おちつく」「安心」「楽しい」「おもしろい」などの「選択理由カード」とインタビューから心理的側面をグルーピング前の生活経験年数の長短と子ども達の発達、ルーム別の視点によって分析するものである。その際、心理学の既往研究から「居場所」の心理的機能因子「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6要因^{注18)}と「物理的環境」要因によって子ども達のインタビューで聞き取った「居場所」感を整理し、子ども達が拠り所とする「居場所」のあり方を導き出し、安定した環境について考察する。

施設に居住する2~18歳までの子ども達を身体的発達や精神的発達を考慮して発達段階の年齢区分を参照し^{注19)}、本稿では対象を小学4年生以上とし、学童期を小学生、青年期を中学生、高校生に分けて分析を行うこととする。

3. 子どもたちが選んだ「居場所」による考察

表1は、対象児童の属性と全2回のインタビュー結果で、子ども達が選択した居場所(1~5位)を調査年毎に個人別に入所順に表わしたものである。また、調査では「居場所」5位までを求めたが、子ども達が選んだ「居場所」数の平均は、2003年4.21、2006年2.96で、2006年には「居場所」1位のみ選択した子どもが2人いた。そこで、「居場所」1位に焦点を当て、「発達別」「グルーピング前生活経験年数別」「ルーム別」の3視点から比較を試みた(図4)。

3-1 子ども達の居場所

2003年の調査時はどの子にも「自室」が与えられている状況で、(グルーピング前生活経験年数期間ごとの、「自室」以外の場所を1位に選択した子ども達のそれぞれの期間に該当する子ども達に対する割合が「10年以上」69.2%、「5~10年未満」50%、「1~5年未満」12.5%、「1年未満」25%という2003年の結果で、入所間もない子ども達を

図4 「居場所」1位 (2003年：n=33、2006年：n=25)

図5 「居場所」1位選択理由カード (2003年：n=33、2006年：n=25)

表2 前生活経験年数別ルーム構成

	小4 経年変化対象児童							
	S		T		B		A	
	2003年	2006年	2003年	2006年	2003年	2006年	2003年	2006年
1年未満			高①	中1、高③	中2・③	中1、高①	小⑥	中②
1～5年未満	小6	小4・5	小4・⑤、高2・③	小⑥、中①	小④、中1	小4・5・⑥	小5	
5～10年未満	小⑤、高1	中①	小4	小5	小⑤・⑥	中①・②	小④・⑥、中②	小⑥、中2
10年以上	中②・③、高①・②	高①・②・③	中③、高2	高②	中3・③、高1・③		中③・③	高②
合計人数	8	6	8	6	10	7	7	6

除くと前生活経験年数が長期な子どもほど「居場所」1位を「自室」以外に求める傾向であった。2006年は「自室」だけでなく「居間」もルーム専用になって約2～3年経過した時で、「自室」選択が半減した「1～5年未満」を除いて「1年未満」「10年以上」がわずかに増え、「5～10年未満」は「居間」の選択がなくなった分「自室」が85.7%に増加し、他に「ベランダ」を選択していた。

ルーム別では「居間」を共用していたS・Tルームのうち、新に「居間」が設置されたTルームが「居間」を、「居間」が専用になったSルームが「自室」を増やした。一方、早くからグルーピングされていたAルームは「居間」の、Bルームは「自室」の選択を減少させ、ともに「ベランダ」を選択する子どもがいるようになった(図4)。

発達面では、「自室」選択者の割合においてあまり差がみえなかった2003年から2006年への変化は、小学生58→37.5%(全小学生に占める割合)、中学生50→77.8%(同)、高校生55.6→62.5%(同)で、小学生のみ減少した。居場所1位を場所数で小学生は3から5箇所へ、中学生は4から3箇所へ、高校生は数の面では変化がなかったが場所は変化した(図4)。

3-2 「居場所」の経年変化

前生活年数期間別ルーム構成(表2)から、経年対象児童のうちグルーピング前の生活を5年以上経験した子ども達は経年対象児童全体の65%を占め、2003年は比較적인いろいろな場所に「居場所」1位を求めている。「居場所」1位の経年変化(表3)を主要な空間ごとにみることにする。

- 1) 「自室」: 最初に「居場所」としての選択者が多い「自室」の変化をみる。1位から4位までの「自室」選択者は16人であるが、そのうち「居場所」1位に「自室」を選択した子ども達は、表3にあるように10人で、そのうち6人(A・Bルーム各2人、S・Tルーム各1人)が変わらず、4人が「自室」以外に移動した。その変化をルーム別にみると、A・Bルーム2人の子ども達が「幼児部の部屋」「ベランダ」へ、T・Bルームの各1人が「居間」へ変更した。そして2006年に「自室」以外の場所から「自室」に変更した子ども達4人のうちのSルームの2人が占めていた。
- 2) 「居間」: 「居間」を「居場所」1位にした子どもは、2003年がAルームの2人で、2006年、かれらは「自室」と「ベランダ」に「居場所」を変化させた。2006年はTルームとBルームの小学生各1人が「自室」から、Tルームの高校生が「パソコン室」から「居間」に変わった。
- 3) 「ベランダ」: 「ベランダ」を「居場所」1位にした子ども達は2003年、T・Aルーム各1人であったが、2006年は「自室」と「運動場」へ、逆に、B・Aルーム各1人が「自室」「居間」から「ベランダ」へ変更となった。

表3 経年変化対象児の居場所1位の変化

	2006年				
	自室	居間	ベランダ	幼児部の部屋	運動場
2003年					
自室	MST, JF, YY, TS, TO, EG	NO, JT	RT	SK	
居間	RS		YT		
ベランダ	ES				YI
園長室	EM				
パソコン室	KT	TT			

表4 経年変化対象児の居場所1位「選択理由カード」の変化

	2006年						
	おちつく	安心	あたたかい	面白い	広い	その他	
2003年							
おちつく	MST, YT, TS, YY		NO	SK			
安心		EG					
のびのび	RS						
楽しい	TO						
面白い	TT						KT
広い			RT				
その他	JF	ES			JT	YI	EM

4)「**幼児部の部屋**」:「幼児部の部屋」を「居場所」1位とした子どもは、2003年は選択者がなく、2006年はAルームのSKが「自室」から1位を変更した。

3-3「居場所」の物理的側面の考察

2003年に「居間」を共用していたS・Tルームのうち「居間」が新しく設置されたTルームが「居間」の、もともとあった「居間」が専用になったSルームが「自室」のそれぞれ順位を上げる子ども達が多くなったこと、逆に早くからグルーピングされたAルームが「居間」の、Bルームが「自室」の選択順位を下げた(図4)。

これらの一つの要因として、ルーム構成員の違い(表2)が考えられる。「自室」を増加させたSルームは2006年、中学生と個室である「自室」を持つ高校生が半数を占め、一方「自室」を減少させたBルームは7人のうち小学生が3人を占めていた。そして、小学生は2003年時、前生活経験年数「5〜10年未満」に、2006年は同「1〜5年未満」に属している割合が高く、図4より小学生は「自室」「居間」とそれ以外の「その他」に居場所を選択している傾向であることが伺え、データ不足が否めないが、グルーピング後の生活経験が小学生と中学生に居場所としての「自室」評価に差異を生じさせ、そこに発達段階の違いがその一つの要因であると考えられる。

また、「居間」を増加させたTルームは前生活経験年数「5年未満」

の子ども達が6人中4人、逆に減少させたAルームは同「5年以上」の子ども達が6人中5人を占めていた。そして、同2006年の「5〜10年未満」の中高生は「自室」に居場所を求めているが、同「10年以上」の中高生は両年ともに居場所1位を「自室」以外に求める傾向がみえる(69.2%、60%)。

以上からこれも断言はできないが、子ども達の前生活経験の年数が子どもたちの「居場所」選択に与えた影響が伺える。

4. 「居場所」「選択理由カード」による考察

次に、「居場所」の選択理由によって、「居場所」の持つ心理的側面を考察する。

4-1「居場所」1位の選択理由の変化

最初に、2003年の中高生と「5〜10年未満」の小学生、2006年の「10年以上」の高校生、「1〜5年未満」の小学生の「選択理由カード」が多種類であったこと、高校生が2003年「楽しい」を選択していたが2006年は選択しなくなり、中・高生は「おちつく」を増加させた(46→78%、20→37.5%)が、小学生は減少(50→25%)させた。

次に、経年変化を見ると、両年ともに同じ「選択理由カード」であった子ども達は、「おちつく」4人、「安心」1人の計5人で、「おちつく」を選択した1人(居間→ベランダ)を除いて、皆「自室」の選択理由であった。彼らの5人のうち3人がAルームの子ども達で、2006年の選択理由「その他」の3人はすべてSルームの子ども達であった。

4-2「居場所」である「自室」「居間」「ベランダ」の選択理由の分類

経年変化対象児へのインタビューから得た選択理由を2-3の分析方法、「居場所」の心理的機能因子の6要因と物理的要因を使い分類した結果(図6・7・8)を「自室」「居間」「ベランダ」について述べる。

1)「**自室**」:選択理由カードの変化は、「静か」「明るい」「広い」「小さい」が2006年には選択されなくなり、「自分ひとりになれる」「ベッドに入ると安心」という理由で「開放的」が新に選択されたことと

「おちつく」「安心」が増加した。

また、子ども達から聞き取った

「自室」の選択理由分類から、

「居場所」1位に着目し、2003年は「自分の好きなことをする」

等の「行動の自由」が8人と最も多く、次は「自分の場所がある」等の「精神的安定」が4人、

「他者からの自由」が2人、「自己肯定感」1人であった。

図6 「自室」選択理由分類

図7 「居間」選択理由分類

図8 「ベランダ」選択理由分類

2006年は、「他者からの自由」が最多6人で「一人になること」が求められ、仲間の存在に関する発言がなくなった。他は「自分の物があって好きに飾ることができる」の「自己肯定感」が1人2003年最多の「行動の自由」が4人、「精神的安定」が2人であった。

2)「居間」：多く選択された理由カードは、「のびのび」「楽しい」から「ゆかい」「あたたかい」（2003年は陽だまりによるあたたかさを意味していたが、2006年は雰囲気があたたかい）に変化した。同じように図7から、「居場所」1位をみると、人と一緒にいられ、話したり、遊んだりする「被受容感」が1人から3人へ、「居心地が良い」とあるように「精神的安定」が0人から2人へ増加し、逆に「行動の自由」が1人から0人に減少した。テレビの存在を選択理由1位ではないけれど、あげている子ども達の数がわずかに減少し、さらに「行動の自由」を理由にあげながらも「皆で」がその行為の前につき「被受容感」、帰属意識を表現している。

3)「ベランダ」：2003年、子ども達は、「ベランダ」に「精神的安定」を求め「気持ち良い」カードを選択していたが、2006年には「ボーっとしている、自然を眺めていると自分の気持ちが晴れる」「考え事をする」など「思考・内省」をすることで「気持ちよい」カードを選択するようになった。

4-3「居場所」の心理的側面の考察

2003年には多様な「選択理由カード」を選択していた「5～10年未満」の子ども達が成長し、かつグルーピングの生活を経て、2006年には「おちつく」「あたたかい」「開放的」を選択するようになった。一方、「10年以上」の子ども達は同じように成長し、グルーピングの生活をしているにもかかわらず、両年共に多様なカードを選択していたことを鑑みると、グルーピング前の生活経験年数の長短が子ども達の居場所選択理由に影響を与えていることが伺える。

また、選択理由カードの経年変化で「おちつく」「安心」などの精神的安定を意味するカードの増加が見られたが、子ども達から聞き取った「自室」の選択理由から、子ども達が「自室」を「行動の自由」とともに「他者からの自由」を求めて「おちつく」居場所とみるようになった^{注20)}。「自室」（共同でも自分の部屋があること）確保から時間の経過と共に子供達が「自室」を単純に「自分の好きなことをする」から他者から自由になる「一人になれる」を重視し、かつ「自分の好きなように飾る」とあるように部屋を自分らしく表出する

図9 領域形成事例

能動的行為を重視するようになった。「居場所」1位に注目してみると、同じように「行動の自由」を求め、いろいろなことができる居間から「雰囲気が良い。（ルームの）仲間がいる。」という「被受容感」と「精神的安定」が増加した。仲間とテレビを見たり、会話するだけでなく、仲間の存在があるから自分の存在が肯定され、仲間と一緒に居ることが安心感を導き、行動を共にする「居場所」＝「居間」という考えに変わったように思える。選択者が増加した「ベランダ」は、「精神的安」からそれと共に「思考・内省」を求める場としてのあり方が加わった。

5. 居場所としての個人の空間

次に居場所の実態を「自室」に対する主体的な「自分らしく表出する能動的行為」から捉えることとする。また、子ども達は、「自室」「ベランダ」の選択理由のインタビューの中で「他者からの自由」に分類した「一人になる」ことを求めている。実際、子ども達は、2～4人で一部屋の「自室」で生活している。空間において制限されている中で、子ども達がプライバシー確保のために同室の子ども達同士、部屋の使い方に工夫を凝らし始めた。たとえば、「人が入ってくるのがいや」という言葉を裏付けるかのように、ドアに「入室禁止、用事のある人はノックを！」と書いた紙を張り、部屋以外の人の出入りを制限し、部屋の掃除当番表を作り部屋の管理を仲間同士でしていた。また、時間の経過と共に家具を移動し、それぞれの領域を形成するケース(図9)がみられた。このような個人の空間を形成した子ども達は「自室」を居場所1位とする子ども達でもあった。

例えば、事例Cは2段ベッドを1段の並列にして個人の空間を作り、窓際にベッドを1列に並べ、お互いに壁に足を向けて休み、部屋の中央に見えない壁を作っていた。かれらは半年後にまた掃除を兼ねながら家具を移動し、自己のプライバシーを形成した。事例Dは、グルーピング前は保育者による家具配置であったが、住み始めてから2ヵ月後に二人で部屋をベッドで区分し、入り口周辺を二人の共有空間、かつ二人以外の子ども達との交流スペースとして位置づけていた。

6. まとめ

本稿で得られた知見を要約すると以下の通りである。

- ①グルーピング当初の2003年は、前生活経験が長い子ども達のほうが短い子ども達に比べて「自室」以外の場所に「居場所」を求める傾向があった。
- ②グルーピングの生活環境になじみ始めると居場所選択に発達段階の差がみられ、小学生は「自室」以外に、中学生は「自室」に、高校生は以前の生活経験が長期の子ども達を除いて「自室」に求めている。

①・②より住環境の影響が子ども達の「居場所」選択に見ることが

できる。

③「居場所」選択理由の経年変化からグルーピングによって「自室」を得たことが子供たちに心「おちつく」居場所を提供したことが伺えた。

④「自室」の確保は、個人の空間形成、領域形成を助長する。子ども達のそれぞれが自分らしく部屋を飾り、中学生になると家具を移動して「個人の空間」を形成するようになった。

⑤「自室」の確保によって、「居間」に自分を肯定してくれる仲間の存在を求め(被受容感)、さらに「皆が集まる、居心地が良い」というように帰属意識から「精神的安定」を求めているように思われる。

⑥「精神的安定」と「思考・内省」を求め、「他者からの自由」つまり一人になれる空間として「ベランダ」にそれを求めている。このことから「自室」(高校生を除く子ども達は2～3人の共同部屋)の確保だけでは十分ではないことの要因の解明と対応が今後の課題である。

昨年、わが国の社会的養護の施策が方向転換され、施設改築の際には、ユニットケアが指導されることになった。施設形態やケアシステムの変化がなされるときには、そこに住む子供達一人一人の心の動きがあり、新しいことや変化を受け止めていくのに一つ一つ確かめていく時間が必要であり、そのような時、既存施設の改変によって小規模化するA園の取り組みは一つのあり方として参考になるであろう^{注21)}。

今後は、児童養護施設の環境を「関係構築の場」という視点から子どもとともに生活をしている保母・指導員と子どもたち、また、子ども達同士の関係などを明らかにすることを今後の課題としたい。

謝辞: 度重なる調査にご協力いただいたA児童養護施設の子ども達及びスタッフの皆様に感謝申し上げます。

注

注1)この数値は、2003年、文献

1)の統計数値で、養護施設入所児童30,416人が対象である。

注2)小規模化の必要性は、「日常生活の中で特定の養育者との密接な交わりができるように児童養護施設の縮小あるいは里親委託の拡大の両側面から行う必要がある。」文献2)

注3)全国児童養護施設の形態別分類(右上図)。出典(全国児童養護施設協議会)

注4)本論文では主としてケア単位の小規模化について分析しているが、ケアの個別化という点については、スタッフ対象(24人)にグルーピングの評価に関するアンケートを2004年10月に実施している。結果は、「子ども達を把握」しやすく(86.6%)、「子ども達との関係作り」がしやすく(93.3%)なり、「ルーム全体での話し合い」が増加(66.7%)し、「子ども達の手伝い」が増え(53.3%)、「自己のルームへの責任意識」も増えた(60%)と評価し、「食事と一緒にとるよう心がける」ようになった(66.7%)が、「グルーピングによる達成感」が増えたと感じたのは26.6%、変わらなかったが53.4%であり、個別ケアに関する有効性が伺える。

注5)施設病。乳幼児期に何らかの事情により長期にわたって親から離され、施設に入所した場合にでてくる情緒的障害や身体的な発育の遅れなどの総称。

注6)国家や社会が、一夫一婦制家族において期待される「家庭養育」を要保護状態にある児童に理念的に与えようとする社会的な養育。

注7)アタッチメント。ある特定の対象に対して強い情愛的結びつきを持つとする人間の特質。

注8)東北6県の31養護施設の空間構成から施設の分類を試みた文献3)、広島県下の養護施設の実態調査と分類、居住空間の構成と分類化からその重要性を指摘した一連の研究、文献4)

注9)昭和40年全国養護施設の建物実態調査の結果を基に、形態系と処遇系に施設を分類し、それぞれの指標の相互関係、子ども達の日常生活と保母の勤務に着目して、施設の類型化と特性の考察を試みた文献5)

注10)養護施設のリニューアル計画における建築計画の役割、参加型ワークショップの実践報告、文献6)

注11)児童の生活行為と保母の動線調査による事例研究、文献7)

注12)情緒障害児短期治療施設における子ども達への環境療法の事例研究から小舎型空間のあり方が環境療法に寄与していることを指摘した文献8)

注13)文献9)pp.341

注14)「子どもの居場所とは子ども自身がホッとして安心できる、心が落ち着ける、そこに居る他者から受容され、肯定されている実感できるような空間をいう」文献10)pp.103

注15)「居場所とは諸活動の基地や拠点となる心理的・物理的空間であり、これを中心として日常生活が営まれ、対人関係が形成される」文献11)pp.13

注16)「いつも生活している中で、特にいたいと感じる場所」文献13)pp.290

注17)室内空間の評価を示す形容詞等を文献12)を参考にする。

注18)「居場所」の心理的機能の分類は文献13)pp.293を参考にする

居場所の心理的機能分類

被受容感	その場所に自分を受け入れてくれる他者がいること、人と一緒にいられる、一人じゃない、自分はそのメンバーである
精神的安定	無理をしないで本当の自分でいられる状態、おもしろい、楽しい、自分らしくいられる、安心する
行動の自由	自分の好きに、自由に行動できること、自分の物がある、自分だけの時間がある、寝ることができる
思考・内省	自分のことについてよく考える、物思いにふける、ボーっと考え込むことができる
自己肯定感	何かに夢中になれる、自分に自身が持てる、好きな物がある、自分の能力を発揮できる
他者からの自由	他人のペースにあわせなくてすむ、ひとに会わなくていい、人を気にしなくていい

注19)小室は「8～9歳前後で知的活動・社会的行動などにおいて変化が見られる」と指摘し、また青年期(12～24・25歳)を変化の激しい16～17歳を区切りに3段階にわけていることから、身体的発達や精神的発達を考慮しての発達段階の年齢区分乳児期：0～1歳、幼児期：1～6歳、学童期：7～11・12歳、青年期：12～24・25歳(女子11～23歳)、学童期8～9歳ごろに知的活動や社会的行動などにおいて変化が見られることから学童期を2つに区分、青年期も前・中・後の三区分、文献14)

注20)子ども達が「自室」を選んだ理由としての選択理由カードの経年変化からこの結論を導いたもので、「自室」以外の空間を好ましくなくなったということも考えられる。

注21)ユニットの施設を建てることで事済むのではなく、いかにそのハードを子ども達のために使いこなすことができるかが重要で、A園の事前の取り組みを評価したい。

参考文献

1)厚生労働省雇用均等・児童家庭局：養護施設入所児童等調査結果の概要【平成15年2月1日現在】、2004.7

2)全国児童養護施設協議会・制度検討特別委員会：子どもを未来とするため一児童養護施設の近未来、pp.34、2003

3)笈和夫他3名：養護施設における生活空間構成に関する基礎的研究 その1-2、日本建築学会東北支部研究発表会、pp.137-144、1977.12

4)住田浩典他2名：養護施設の計画に関する基礎的研究 その6-7 日本建築学会学術講演梗概集、pp.1341-1344、1983.9

5)坪井善正：養護施設の類型化に関する基礎研究 その1-2 日本建築学会計画論文報告集No370、pp.22-32、1986・同376、pp.66-75、1987

6)本間敏行、小野田泰明他：養護施設のリニューアルにおける建築計画の実践 日本建築学会技術報告集No3、pp.212、1996.12

7)笈和夫・本間俊行：養護施設における児童の行動特性に関する研究-グループホームを例として 日本建築学会東北支部研究発表会、pp.37-44、1983.3

8)石垣文、菅野實他：情緒障害児への環境療法の展開にみる小舎型施設空間の意味 日本建築学会計画論文集No582、2004.8

9)Frank W. Putnam：Dissociation in Children and Adolescents — a Developmental Perspective, Guilford Press, New York, London, 1997 (中井久夫訳：解離一若年期における病理と治療、みすず書房、pp.341、2001)

10)住田正樹：子どもの居場所と臨床教育社会学、教育社会学研究 No74、pp.93-109、2004

11)中村泰子：居場所がある居場所がないとの比較、大阪市立大学児童・家族相談所紀要No16、pp.13-22、1999

12)船越徹、積田洋、望月厚：室内空間の評価システムに関する研究(その1)一心理分析一、日本建築学会学術梗概集、pp.247-248、1985.10

13)杉本希映、庄司一子：「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究No54、pp.289-299、2006

14)小室庄八：児童心理学 現代心理学叢書6、pp.54、1975

15)日本建築学会編：環境学会心理調査手法入門、技報堂出版 2000

(2007年12月10日原稿受理、2008年5月14日採用決定)